■研究発表論文

山形県上山市における中心市街地再生に向けた協働のまちづくり

Activities by Collaborations with Administration and Citizens towards the Regeneration of the Town Center in Kaminoyama City, Yamagata Prefecture

温井　亨*

Tohru　NUKUI

Abstract : The purpose of this paper is to report the activities by collaborations with administration and citizens towards the regeneration of the town center in Kaminoyama city. The characteristics of the activities are as follows: 1) The activities concentrate in the compact core area of the city and they base on its history and culture. 2) There are various types in the activities. 3) In the first stage the administration took the initiatives of beginning the activities of collaborations. As a result the leader and the basic principles of the town planning were generated. In the second stage the basic principles were realized as a visible shape, and some activities by citizens started. In the third stage the characters of activities changed because other types of leaders came from the outside of Kaminoyama.

Keywords: *town center, town planning, collaboration, community architect, Kaminoyama city, Yamagata prefecture*

キーワード：中心市街地，まちづくり，協働, コミュニティ・アーキテクト, 上山市, 山形県

１．はじめに

山形県上山市は，1986 年の第 4 次上山市振興計画で「市民参加によるまちづくり」を掲げて以来, 協働のまちづくりに取り組んできた。そして近年，黒板塀で武家屋敷地区を修景する市民活動や，四阿を建て観光客にお茶を振舞っている女性団体の活動，空店舗をギャラリーに改装した長屋門ギャラリー（所有者が市に無料で貸し, 市民と学生で改装）など，様々な協働のまちづくりが中心市街地で行われている。酒田や新庄など地域の中核都市でさえシャッター商店街化している山形県内で，賑わいを取り戻すまでには至っていないが，歴史と文化による様々なまちづくり活動が行われている上山は注目される。

本論文の目的は，こうした中心市街地におけるまちづくり活動が，次節で述べる中心市街地再生の仮説によく一致して，歩いて回れる範囲に集中していること，歴史と文化に基づいた活動であることを報告することである。次にこれらの活動が，行政によって，あるいは市民によって，あるいは両者の協働や大学との連携によって行われていることを報告することである。そして第３に，このような多様な活動が，中心市街で集中的に行われるようになったのはなぜか，まちづくり活動の展開を時間軸にそって追うことで，活動内容の移り変わりを調べ，活動相互の影響や担い手の変化を探ることで，その理由を明らかにすることである。

２．中心市街地再生の仮説

まず, 中心市街地再生の仮説について述べよう。その仮説とは, 中心市街地の核である中心商店街の再生には，商業振興だけを図っても難しいというものであり，むしろ情報のやり取りの場としての機能に注目するべきだというものである。中心商店街の衰退は車社会の進展による構造的な理由による。利便性や価格，品揃えの豊富さが優先する小売商業では，中心市街は郊外の大型店に敵わない。しかし，中心商店街，その前身である市の立った町場の機能には，当初から物の交換や売買の他にもう１つ，情報の交換という機能があったと考えられる。カフェでのおしゃべり，観劇や演奏会, 美しい商品の並ぶショーケースを見て回る楽しみは, それを現在に引き継ぐものである。日本の地方都市に欠けているこうした機能が強化されることで，郊外や農村部の人達も中心部を再び訪れるようになる。そのとき，中心部に残る歴史的建築, 町並みは人々の情報交換，出会いの場の舞台を形づくるし，それが文化財として位置づけられれば都市観光の対象になる。そして, 遠方からの誘客も図り，まず中心市街地を訪れる人を増やす。そして，その結果として商店も潤うというのが，この仮説である。上山は県内有数の温泉地であるので，こうした方向性には適性があると考えられる。

３．本論文の構成と方法

次に本論文の構成と方法について述べる。既往研究のレビューのあと，まず第５節で，上山市において，仮説と一致したまちづくりが行われている様子を報告する。

第６節では，前節で描いたまちづくりが，いつ行われたのか, どのような活動組織, 理念で行われたのか，主な活動成果，組織・担い手，財源・運営資金などについて説明する。

第７節では，このようなまちづくり活動が，どのように生まれたのか，市民活動や協働のまちづくりが育った理由を検討する。そのために活動内容が時とともにどう移り変わったのか，また活動間の影響を調べ，担い手の変化を分析する。

そして第８節のまとめにおいて，各節の結論を意味づけるとともに，残されている課題を指摘し，今後の方向を展望する。

次に，このような研究を行うための調査方法について述べる。最初に述べなくてはならないのは, 筆者が2010年度より上山市まちづくりアドバイザーを務めていることである。したがって，筆者が直接見聞したことについては自身でまとめた。一方，直接知りえない諸活動の詳細や，過去の活動や施策については，振興計画などの報告書等資料と，市役所職員や，まちづくり活動をして

*東北公益文科大学公益学部

いる市民からの伝聞によった。伝聞をもとにまとめた部分の信頼性については，表 - 1 にある方々に読んでいただき確認した。

表 - 1　本論文を読み内容確認した方々

桝口　豊	副市長		
酒井信一郎	地元建築家	NPO法人上山まちづくり塾理事 城下町再生志士隊隊長 建築探偵団代表	
小松正和	地元建築家	NPO法人上山まちづくり塾理事 城下町再生志士隊	
市職員	観光課長	NPO法人上山まちづくり塾	武家屋敷通り整備のときの総合政策課係長
市職員	総務課主任	NPO法人上山まちづくり塾 城下町再生志士隊事務局	武家屋敷通り整備同課担当者 城下町再生志士隊呼び掛け人
市職員	経営企画課主査	NPO法人上山まちづくり塾	十日町にまちづくりセンターが移った時の同課担当者。当時はまちづくり塾事務局も兼務。

4．既往研究と本論文の位置づけ

本論に入る前に本論文を既往研究に中に位置づける。そのとき事例･報告分野の論文として，他の分野のような理論的に未開拓の問題を明らかにするという意味での新規性やオリジナリティよりも，実践的な有効性や，それぞれの地域・時代に固有のまちづくり活動を具体的に良く補足しているか，また手をつけられてない地域における報告であるかを視点としてレビューを行った。

以上の視点からまず本論文の特徴をまとめると，a)住民参加・協働のまちづくりに関する研究であり，対象となる活動をアンケートなどで収集して統計的に処理したものでなく個々の活動内容，担い手などを具体的に扱い，さらにその通時的な発展を追ったものであり，b）著者自らが活動の当事者であり，c）東北地方の活動を対象にしたものであるということになろう。

これを 2006～2010 年の日本造園学会，日本都市計画学会，日本建築学会の査読付き論文と，その中の引用・参考文献として挙げられたさらに過去の論文を加えて調べると以下のような論文が該当する。まず，a）b）に該当するのは吉村による名古屋市名東区「めいとうまちづくりフォーラム」の研究 [1]，田中による吹田市「まちづくり市民フォーラム」の研究 [2]，柳川らによる堺市金岡町のまちづくり活動に関する研究 [3]，登根らによる関西の大学のまちづくり参画に関する研究 [4]である。このうち前二者は，個々のまちづくり活動そのものではなく，諸活動の対話と交流，あるいは議論の場としてのフォーラムを扱っている。柳川らの研究はアーバンフリンジを対象としたものであり，単一の住民組織を扱っている点が本論文と異なる。登根らの対象は大学に限られ，実効性よりは教育的側面が強い。以上に加えて，先駆事例として著名な世田谷区の事例を報告した卯月の論文 [5]を，これまでに書かれた住民参加によるまちづくりの基本的文献として挙げておこう。

自ら当事者としてかかわるというｂ）の条件をはずすと，藤本らの兵庫県立有馬富士公園に関する研究 [6]，柴田らによる神戸市の里づくり計画に関する研究 [7]，島田による小布施市と桐生市に関する研究 [8]が挙げられる。藤本らの研究は住民参加による公園の管理･運営等の活動に関するものであり，柴田らの研究は都市農村交流である。島田の研究は，まちづくり活動の担い手の人間関係を分析し，その相互作用や継承，発展性について研究している点で本論文に先立ち，また他に例を見ない。まちづくりに絞り時代を遡って当たると，野嶋らの長浜における研究 [9]が，複数の市民組織の活動の展開を追っていて本論文に近い。内田らの研究 [10]は個々の活動を具体的に扱ったものではないが，我が国におけるこうしたまちづくりの発展経緯全般を展望している点で参考になる。内田によれば，1990 年代以前には市が構築したまちづくりプログラムに組み込まれた地域別のものが多いとされるが，そうしたものとして田中らの豊中駅前地区まちづくりを扱った研究 [11]，田川らの中野区住区協議会を扱った研究 [12]，秋田による神戸市まちづくり協議会の研究 [13]が挙げられる。後者は地区計画を目指した地区ごとの協議会であり，財産権の制限を含むため，まちづくり条例を定めるという手続きを踏んでいる。本論文が扱う上山市の事例と比較すると，上山は市民によるささやかではあるが様々な自発的活動が市によるコントロールを離れて起きている。これは内田らの時代区分によれば，提案型助成制度の時代の特徴とも言えるが，現在行われている町家調査が町並みルールづくりへと進むことも考えられるので，形態規制の前段階にあるとも解釈されるだろう。

全般的言えるのは，近年，各学会が事例報告の新分野を設けたにもかかわらず，地域に入って住民と自ら行うまちづくりの報告は少ない。実践自体が少ないのか，報告が為されないのか，課題と言えるだろう。また，c）の東北地方における報告が１件もないという地域的偏りも大きな問題である。

5．中心市街地の散策コース

上山市のまちづくり活動が仮説と一致して，中心市街地の歩いて回れる範囲に集中し，歴史と文化に基づいたものであることを説明しよう。それには読者の皆さんを訪問者に見立て，城址公園まわりを一周する散策コースを案内すれば良い。それによってそこに歴史と文化が保存され，それを活かした見所がコース内に点在していること，退屈せず楽しみながら散策し，疲れたら休める場所，食事のできる場所があり，トイレもあること，あるいはそうした方向を目指してまちづくりが進んでいることをご理解いただく。なお，このコースは現在申請中の，中心市街地活性化基本計画で位置づけられている。

図 - 1 をご覧いただきたい。上山は明治まで上山藩が治めた城下町であり，羽州街道の宿場であり，温泉でもあった。須川に望む台地の突端に城を構え，台地上に武家地，低地に町人地である宿場を持っていた。城周りの散策路は，そこを回るので地形の起伏に富み，眺めが良い。アから順に歩いていこう。

図 - 1　城址まわりの散策コースと見所，休み処

ア　上山市まちづくりセンター：明治に建てられた元郵便局の洋風建築である。観光パンフレットが置いてあり，センター職員に尋ねれば観光案内してくれる。また，大きなテーブルは市民が会合する場となっている。トイレどうぞの掲示がある。

イ　上山まちづくり塾事務所：塾が独自に構えた事務所で，職員を雇い運営している。カフェに改装中であり，塾生がお茶を飲

みながら会合するほかに，観光客や市民も飲食ができる場となる予定である。

ウ　旧梅津歯科医院：上山藩の御殿医だった時代から医院，歯科医院として続く旧家である。登録文化財の調査が行われた。登記上の問題から 2011 年度の申請は見送られたが，近々申請が予定されている。

エ　長屋門ギャラリー：旧梅津歯科医院は通りに面して長屋門（明治初期には建っていたと考えられる）を持ち，そこに 5 軒の店子が入っていた。その中の空店舗を改装したギャラリーで，2010 年度は東北芸術工科大学（隣の山形市にある）の学生作品を展示していた。現在は市民の作品展示に移りつつある。

オ　アトリエ SOU：これも長屋門にあり，空店舗を改装してつくられたアトリエである。若手工芸家が 2 階に住み込み作家活動を展開している。作品購入や，シルバーリングづくり，七宝焼きづくりなどが体験できる。土～月に営業しているので，ありきたりでない土産としていかがだろうか。

カ　城への上り口にある土蔵：2 棟の土蔵が並んでいる。片方は市が長年借り温泉組合が使用していた土蔵で，もう一方は，2009 年に取り壊されそうになったところを市が待ったをかけ，買い取った土蔵である。現在どう使い，どう修復するかを検討中である。併置されている公衆トイレも，整備にあわせて新しくすることが計画されている。

キ　城の堀跡：市の文化財に指定されてはいるが，現在は藪のなかにある。上山小学校の耐震化建て替えにあわせて整備が計画されている。

ク　折鶴：地元の食材にこだわったヘルシーな料理が食べられる。武家料理の再現も味わえる。

ケ　武家屋敷と武家屋敷通り：坂を上りきった台地の上には，茅葺の武家屋敷が 4 軒並んでいる。これらは旧上山藩の中級武士の屋敷で，1992 年から 2004 年にかけて市指定文化財となっていて庭が公開されている。2010 年にはそのうちの旧三輪家住宅を市が買い取り，内部も見学できるようになった。また，その前面道路は縁石等一部に石を使った美しい舗装が施され，ベンチ等も設置されて休むことができる。

コ　黒板塀による修景：図 - 1 に示す塀は，ブロック塀に黒板塀を貼り付けた修景事業により整備されたものである。武家屋敷通りといっても，4 軒を除けば一般住宅なので趣が出ない。そこで工夫された修景であり，町家地区にもひろがりつつある。

サ　紫苑庭：武家屋敷旧曽我部家の裏庭にまわると四阿があり，場所にあわせたデザインのトイレも建てられている。この四阿は紫苑庭といって，武家屋敷の訪問客に上山の女性団体が共同でお茶を振舞っている。手づくりの菓子もいただけるかも知れない。

シ　湯町の温泉街：上山温泉発祥の地である。温泉で傷を癒した鶴の彫像が立つ脇に足湯があり，四阿が建てられている。ここは小さな広場で，入る道は鉤の手に曲がり，角には明治時代の旅館建築が残る。半ば閉じている旅館もあるが，再生に向けた取り組みも動きつつある。

ス　山城屋：齋藤茂吉の実弟が建てた旧館が，今年登録有形文化財となった。温泉旅館だったが，現在経営者が変わり新しい営業形態を模索している。

セ　湯の上観音と下大湯：坂を下ると左手の高台の上に湯の上観音がある。境内からは正面に三吉山，左手に蔵王の眺めが素晴らしい。湯の上観音の下には，下大湯の共同浴場がある。上山には全部で 7 つの共同浴場があり，150 円と安く，図 - 1 にも 4 箇所が数えられる。その他，足湯も図内に 3 箇所設けられている。

ソ　十日町の町家群：羽州街道の上山宿であり，上山城下の町人地であった十日町の商店街は，山形県下で最もよく保存された歴史的町並みである。今でも蔀戸，大戸で戸締りする店もある。

タ　清水屋のみちのくギャラリーと石井伊惣治商店の休み処：店の一部をギャラリー，休み処に改装し，市民に開放している。清水屋のギャラリーはバス停の前で，風雨を避けバスを待つのに便利である。

チ　オープン・カフェ候補の空地・土蔵：ここは市が購入した空地であり，隣には空家となっている大きな土蔵がある。両者をあわせてオープン・カフェができないか，検討が始まっている。

ツ　十五屋：和菓子・洋菓子店であり，奥は喫茶店となっている。中心市街散策の拠点として，散策の休憩に便利である。

以上，主な見所，休み処を説明した。その他の飲食店は図 - 1 をご覧いただきたい。さて，大事なところを 2 つほど補足しておこう。まず，散策路が囲む中央の城址部分であるが，ここは現在月岡公園となっていて，そこには郷土歴史資料館としての上山城がある。これは 1982 年に再建された RC 造建築で，江戸時代の城とは配置，形態ともが異なるが，3 人（2009 年まで 2 人）の学芸員が活動している。それから散策路から少し外れて新湯の温泉街がある。湯町に続いて昭和初期から発展した温泉街で，現在は中層化大型化している。湯町に比べると経営状態は良い。

6．まちづくり活動と担い手・活動組織

次に，前節で訪ねた見所，休み処のうち，近年のまちづくりによって整備されたものについて，どういう組織がいつ整備したのか，その活動理念・目的，主な活動成果，組織・担い手，財源・運営資金等について見て行く。表 - 2 にまとめたものを補足しながら解説していこう。

1）上山市まちづくりセンター：前節アのまちづくりセンターは，上山市が運営している。市民のまちづくり活動を支援する目的で 2001 年に設けられた。当初は市の総合政策課の職員が兼任し，実態としては市役所内に市民の会議室が設けられたに過ぎなかったが，それを改善するため，2006 年，中心商店街の現在の位置に移り，運営は上山まちづくり塾に委託された。その後，専従スタッフが雇用され現在に至っている。市民活動組織の会合場所として使われているほか，観光案内所としての機能も果たしている。設立目的の「まちづくり活動の支援」も行っているが，さらに，センター自体が取り組みを企画し，市民に呼び掛け，市民団体を横につないで組織してゆくところまでできないか検討されている。

2）上山まちづくり塾：2001 年に主体的なまちづくりを進める市民を育成する目的で市により設けられた。市が招聘した初代塾長の志賀秀一は，観光コンサルタントとして湯布院等との交流を推進した。男性団体客より女性や個人客に目を向けた湯布院の考え方は，泊り客に浴衣を配ることから，浴衣を着て町を歩いてもらうことへと展開しつつあった温泉組合の「ゆかたの似合うまちづくり」と一致する。そこから，浴衣の似合うアイテムとして，竹灯篭，食用ほおずき，紅花を使ったイベント，商品開発が行われた。また，造園業を営む副塾長の井上睦夫中心に，花で街を飾る活動が行われている。一方，2009 年頃より酒井信一郎，小松正和の 2 人の建築家中心に町家等の実測，空店舗・土蔵の保存修復や，活用のための改装も始った。2009 年には NPO 法人となり，2010 年 5 月には十日町に独自の事務所イを開設して事務所職員を雇い運用している。塾生の構成を見ると，市役所職員の参加が多く，次に一般市民，商店街と旅館からの参加は少ない。年齢幅は広い。

3）長屋門ギャラリー：旧梅津歯科医院の当主と副市長が相談する中で，中心市街活性化という公益的目的のためなら空店舗を無償で貸しましょうという話になり，東北芸術工科大学にいた筆者に活用が任された。そこで学生が作品展示を行うギャラリーにしようと，学生，まちづくり塾の 2 人の建築家（コミュニティ・

アーキテクト)，建具職である塾長，まちづくりセンター職員，市職員と一緒に改装工事を行った。材料費や，大工職に発注した木工事代は市が助成している。開館後の運営は，学生が自主的に企画・展示を行っていたが，筆者が遠方の大学に移ったため，現在は市民展示中心に移行している。

4）アトリエ SOU オ：翌年隣も空店舗となったので，同様な手法で工芸家のアトリエとして改装した。今回は 2 階も住居として手を入れている。若手工芸家が 2 階に住みこみ，1 階で作家活動を行いながら，作品を販売し，市民や観光客に制作体験を提供している。中心市街地活性化に貢献しているということで家賃はとっていない。

5）土蔵・空地の保存活用：図 - 1 カの土蔵では，2010 年 9 月に，東北公益文科大学(筆者が移った大学，酒田市)，東北芸術工科大学が共同で演習を行い，仮設のカフェを 1 日開催し，展示，講演会も行った。また，蔵の前に単管パイプでフレームを組み，学生がデザインしたテントの下でオープン・カフェの実験も行った。2011 年には実際に実現するための検討が，協働のまちづくりで始まった。会合はまちづくりセンターで開かれ，メンバーは副市長，商工会アドバイザー，まちづくりアドバイザー(筆者)，地元建築家 2 人，まちづくりセンター職員，関係各課職員である。検討では模型（図 - 1 カチ）をつくり，夏には再びオープン・カフェの実験を行った。こうした進め方は，いきなり市が業者に発注をかけるのではなく，仮設のイベントで使ってみながら，市民の感想を聞き，一緒につくっていこうという協働のまちづくりの理念によっている。

6）上山藩武家屋敷保存会 ケ：武家屋敷の所有者中心に文化財補助金の受け皿として 1992 年につくられた組織である。2003 年に森本家の当主が上山に戻ってからは維持管理活動も行い，同家でコンサート，女将会のお茶のもてなしなども行われている。

7）武家屋敷通り整備 ケ：当初はたんなる道路工事だった計画を，総合政策課の係長が，この機会に武家屋敷に相応しい通りにしようと，山形県によく来ていた早稲田の都市計画研究室に頼みに行きアドバイスを受ける一方，市民からなる武家屋敷通り整備委員会を設けて検討し実現した。苦労したのは電柱の移設だったということで，武家屋敷側の NTT 電柱 14 本を撤去し，反対側の東北電力電柱に集約している。

8）城下町再生志士隊：武家屋敷通り整備後に，なお趣が不十分であることを感じた市担当者が市民に呼び掛け結成された。整備委員会の委員の一部と，新たに公募したメンバーからなる。市担当者が，交流事業で行われた村上市の黒板塀の講演を覚えていて，最初の活動として村上市を視察した。主たる活動は，ボランティア活動による黒板塀施工コである。材料費は温泉旅館や地元企業の寄付金によっていたが，近年は市の助成金も活用している。

9）紫苑庭 サ：上山で活動している約 30 の女性団体が共同で運営している「女性のつどい」30 周年を記念して始めた事業であり，2005 年から活動開始した。5 月から 11 月までの週末に行っていて，市の助成金を 3 度利用している。助成金審査のおり筆者が，塗料として柿渋をアドバイスしたところお誘いを受け，学生

表 - 2　まちづくり活動と担い手・活動組織

		活動理念・目的	主な活動成果	組織・担い手	財源・運営資金	備考
上山市まちづくりセンター 2001～		まちづくり活動の支援	「ござって$_{\text{ス}}$便り」の発行 まちづくり活動の支援 観光案内（2006～） 長屋門ギャラリーの運営（2011～）	市職員が兼職（2001～2005） まちづくり塾に委託（2006～2007） 専従職員（市役所OG1人、2008～2009） 専従職員（公募で2人、2010～）[13]	市直営 家賃・委託料（2006～2007） 家賃・給与（2008～）[14]	2005年度までは市役所内に市民が会議できる部屋を設けただけだった。 2006年から中心市街の明治時代洋風建築（旧郵便局）に移転。
上山まちづくり塾 2001～		まちづくりの担い手づくり	先進地との交流（2001～2004頃） 全国街道交流会議上山大会（2004） 花いっぱい運動、花卉栽培 ゆかたに似合うアイテムづくり(竹灯篭、食用ほおずき、紅花） 街並み景観プロジェクト（2009～） カフェ営業（2011～）	市民が塾生として参加 市が招聘した塾長（2001～2005） 市民の自主運営に（2005～） NPO法人（2009～）	塾生の年会費 塾長へ市からアドバイザー料（2001～2005） 市から初動期助成（2001～2005） 助成金（国より2010、上山市より2011）	2010年までは まちづくりセンターで会合を持つ。 2010年に自前の事務所開設（中心市街。職員雇用）。 2011年、カフェに改装。
長屋門ギャラリー 2009～	改装	空店舗の活用 中心市街の賑わいづくり	市民、大学、市の協働	市民、大学、市	助成金（上山市より大学へ2009）	
	運営		ギャラリーとして作品展示 コンサート	学生が運営（2009年度） 運営委員会（センター、市、市民、大学：2010年度～）	展示経費は出展者が負担 光熱費は上山市が負担 フルーツパーラー事業2009（果物は市が購入） 使用料100円／日、冬季暖房料100円／日（学生は両方無料）（2011～） 所有者から市が無料で借りる（中心市街活性化という公益的目的に使う条件で）	
アトリエSOU 2010～	改装	空店舗の活用 中心市街の賑わいづくり	市民、大学、市の協働	市民、大学、市	城下町再生志士隊が市の助成で(2010)	
	運営		若手工芸家が2階に住み込み作家活動を行う。 作品購入、シルバーリングや七宝焼き体験もできる。	若手工芸家	家賃無料 所有者から市が無料で借りる（中心市街活性化という公益的目的に使う条件で）	
カ土蔵、チ土蔵・空地の保存活用 2009～		土蔵の保存 賑わいの核施設づくり	カ:土蔵（土地建物）を市が買収。シンポジウム、展示、臨時カフェ。 チ:空地を市が買収。見学会。 周辺も含めた模型で検討:カチ	コミュニティアーキテクト2人、大学、アドバイザー、市、農家の協働	シンポジウム、展示、カフェの費用は大学コンソーシアムと市から。 インターンシップの学生が模型作り	農家は果物提供。
堀跡の整備 2011		放置された文化財の整備	小学校のグラウンドと一体の整備計画案	小学校建替えプロポーザル （設計事務所・審査委員会）	市による小学校立替予算	
寄ってっ亭→折鶴 2007　　2008～		空店舗の活用 地元の食材を使った料理	レストランの営業	女性の市民グループ（2007～） 個人（女性2008～）	自己資金	再現された武家の料理も
上山藩武家屋敷保存会 1992～		武家屋敷の保存・維持管理	茅刈、庭の池のどろかき 住民のいない武家屋敷の門の開閉 森本家でコンサート、女将が茶ふるまい	武家屋敷の所有者と応援する市民	市指定文化財としての武家屋敷への助成	当初は助成金の受け皿組織。活動始めたのは2005～
武家屋敷通り整備委員会 2004年度		武家屋敷に相応しい通りの整備	整備計画の検討	市民から成る委員	市の委員会	早大にアドバイス求める。
城下町再生志士隊 2005～		城下町の町並み修景	ブロック塀を黒板塀に 茅刈、庭の池のどろかき	市民（公募も）。呼びかけ人は上記委員会 市担当者、事務局も務める。	助成金（上山市より2010、2009）	
登録文化財調書作成 2010年度		文化財の登録	旧梅津歯科医院（未申請） 山城屋(2011登録) 旅館よね本(2011登録) 蟹仙洞(2011登録)	コミュニティアーキテクト2人、大学(アドバイザー）、市の協働	市	
紫苑庭 2005～		観光客へのもてなし	武家屋敷の裏庭に建てた四阿で、観光客に湯茶ふるまい。	市内約30の女性団体	助成金（上山市より2007、2008、2011）	
建築探偵団 2006～		歴史的建築の探訪・調査	探訪成果をスケッチと文章で月刊上山(民間誌)に連載	市民（代表はコミュニティアーキテクト）	なし	
十日町未来会 2008～		中心商店街活性化	月一回会合 学生の作品を各店舗に展示 いろは市（売り出し・百円商店街） 診断・助言事業でのプレゼンテーション 先進地視察	上十日町、中十日町、下十日町でつくる十日町地区景観・まちづくり協議会の若手実行組織	市から助成	県都市計画課の呼びかけで、市建設課、商工課が共同で所管
清水屋みちのくギャラリー 2000～		中心商店街活性化	絵画展示	清水屋	自己資金	
石井伊惣治商店休み処（仮称） 2008～		中心商店街活性化	湯茶の用意（利用者が自分で入れる）	石井伊惣治商店	自己資金	整備はしたが使われていない。 名称決まっていない。
ゆかたの似合うまちづくり 2001～		浴衣の似合う町の魅力で集客	宿泊客に無料で浴衣（夏）、どんぶく（冬） 足湯設置(観光協会）、足湯カフェ ミスゆかたコンテスト、市民ゆかたデー 女将が武家屋敷で茶のもてなし	旅館組合。 市民ゆかたデーは市を挙げての取り組み	旅館組合、各旅館	宿泊客に浴衣を選んでもらう取り組みは1994より。

と一緒に塗りに行ったこともある。

10）登録文化財調書作成 シ：地元建築家 2 人が実測調査し，図面を作成した。写真は酒井氏が担当，筆者が所見を担当した。

11）建築探偵団：2006 年から始まり，町家をはじめとする市内の歴史的建築を訪ねる活動を行っている。団長の酒井氏が，ディテールや立面，断面などを実測し，それを月刊かみのやま（民間発行）に連載している。2010 年，連載をまとめて，「かみのやま　街の記憶　時のスケッチ」[14]を上梓した。

12）十日町未来会：2008 年に立ち上げられた十日町地区景観・まちづくり協議会の実行組織であり，月に一度集まり，まちづくりと商店街の活性化について話し合っている。この協議会は，県の都市計画課の働きかけで立ち上げられ，市では建設課と商工課が共同で所管している。よって景観整備を目的とするが，商業振興ももちろん目的である。構成員は旧羽州街道沿いの上十日町，中十日町，下十日町の 3 商店街から成っている。十日町未来会は商店街若手から成り，これまで行った事業としては，上山市中心市街地を扱った学生の演習作品を各店舗に飾るストリート・ミュージアム，市の補助を得て行われる 100 円商店街「いろは市」の開催，経済産業省の「中心市街地活性化に取り組む市町村に対する診断・助言事業」でのプレゼンテーションなどがある。

なお，このプレゼンテーションは助言者である 2 人の専門家から，住民との第 1 回意見交換会の感想として，住民が中心市街地をどうしたいと考えているのか全く分からないと言われたことに対し，筆者が十日町未来会にプレゼンテーションしてもらうことを提案したのが始まりである。このプレゼンテーションは大学の演習作品発表のような形式で行われ，夜間に数回，地元建築家 2 人と筆者が作成指導にあたった。

13）清水屋と石井伊惣治商店：両商店とも，中心商店街活性化のために通りに面した店の一部を提供している。実施した店主の 2 人は，未来会のメンバーの父親の世代に当たる。

14）かみのやま温泉旅館組合：「ゆかたの似合うまちづくり」を掲げ，まちづくりの方向性に大きな影響を与えた。これは浴衣を宿泊客に配る取り組みに遡り，やがてまちづくりに発展した。その趣旨は，温泉旅館の大型化のなかで，旅館内に施設がすべて備えられ，客が外に出なくなったことへの反省がある。かつては外湯に行き，土産物屋で買い物し，温泉客は浴衣を着て温泉街を歩いたものだった。それを復活することで温泉の振興を図ることを目指している。市の協力で，市民ゆかたデーが夏に行われ，その日は駅員や金融機関の行員も浴衣を着て仕事することが行われている。まちづくり活動としては，観光物産協会（主要メンバーは旅館組合）としての足湯設置，木製ベンチの設置，女将会による武家屋敷でのお茶のもてなし，上山城でのミスゆかたコンテストなどがある。新湯の足湯では，足湯カフェと言って，コーヒーなどを出すカフェの営業を旅館組合で行っている。

7．まちづくり活動の展開

前節で説明した様々な活動がどのようにして起こったのか，市民活動が育った理由，協働のまちづくりが可能となった理由を検討する。そのために時間軸に沿い，活動内容がどのように変化してきたかを見るとともに，活動相互の影響，担い手の変化にも目を配る。図 - 2 は 9 つの内容が，どの時期に行われたのかをまとめたものである。

上山市が協働のまちづくりを最初に打ち出したのは，1986 年 3 月の第 4 次上山市振興計画であり，そこでは 4 つの理念の 1 つとして「市民参加によるまちづくり」が掲げられた。しかし具体的施策としては，2001 年 3 月の第 5 次補完計画が「協働のまちづくり推進事業」を掲げ「市民まちづくりセンター」の設置をうたったのが最初である。また同時に「上山人づくり事業」をとなえ，「上山まちづくり塾」の開催を記している。これにより，2001 年に「上山市まちづくりセンター」と，「上山まちづくり塾」がつくられた。ただ，まちづくりセンターは市役所内に市民用会議室が設けられたに過ぎず，この時期に活躍したのはまちづくり塾である。志賀塾長の指導のもと，湯布院はじめ全国の先進地との交流のなかから人材づくりが行われた。上山で行われた第 3 回全国街道交流会議は，市とまちづくり塾の協働による事業で，市の指導により運営された初動期のまちづくり塾の代表的な活動だろう。

一方この時期，上山の旅館組合は，宿泊客に浴衣を配ることから，浴衣を着て街を歩いてもらう「ゆかたの似合うまちづくり」へと転換しつつあった。これを知った塾生たちは，湯布院等から学んだまちづくりとこれが似ていることに気づき，まちづくり塾として協力をして行く。また上山市も，これを市として取り上げ，市民ゆかたデーを始める。こうして，「ゆかたの似合うまちづく

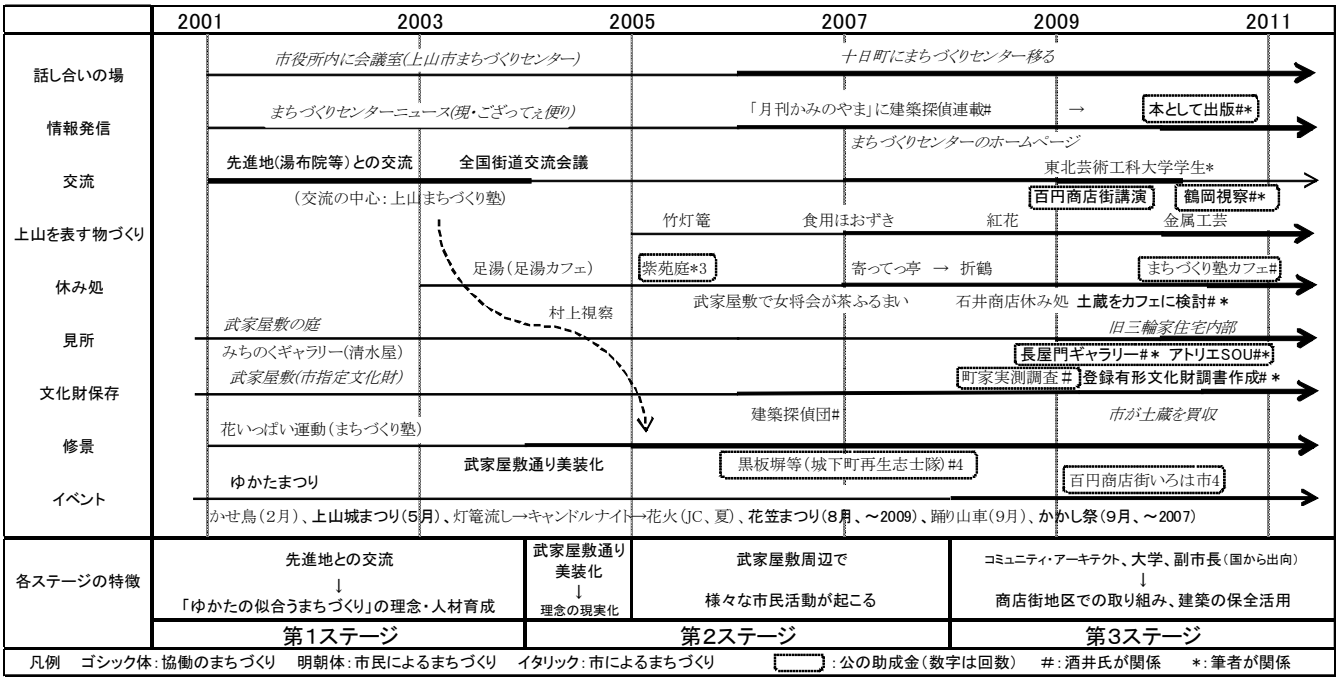

図 - 2　まちづくり活動の展開

り」が，中心市街地におけるまちづくりの理念となって行った。人材育成と理念の形成，以上を協働のまちづくりの第1ステージと捉えることができよう。

変化が訪れるのは2005年以降である。この年より紫苑庭，城下町再生志士隊，建築探偵団など様々な市民活動が生まれている。これらは皆，武家屋敷のまわりで行われていて，女将会が武家屋敷でお茶をもてなす催しも始まった。寄ってっ亭の開店もその中に数えられるだろう。その理由を考えると，前年度に整備された武家屋敷通りの美装化が影響していると思われる。第1ステージで生まれた「ゆかたの似合うまちづくり」の理念が，目に見える形で実現したからである。ただの道路工事予定を武家屋敷に相応しい整備に広げただけで素晴らしいが，早稲田まで連れ出したのは感心する。また，さらに担当職員が，市民に呼び掛け城下町再生志士隊をつくり，道路整備ではできなかったことを市民活動として実現したことにも驚かされる。彼らが所属した総合政策課は協働のまちづくりも所管していて，当時はまちづくり塾の事務局も同課が兼ねていた。実は，彼らは市役所職員であると同時にまちづくり塾の塾生でもある。以上，第2ステージは，理念の現実化により様々な市民活動が生まれた時期と捉えられよう。

その次の変化は，2007年に副市長，大学(筆者)という新たな参加者の登場によって生まれた。第2ステージから活躍していた地元建築家の2人とともに，長屋門ギャラリーやアトリエSOUの空店舗を改装した活用事業，町家などの実測調査，登録有形文化財のための調書づくりなどが行われた。これを第3ステージとすれば，この時期の特徴は商店街の地区を主として対象としたこと，建築の保全･活用に関する取り組みが行われたとまとめられよう。

8．まとめ

上山市の中心市街地におけるまちづくりが，歩いて回れる範囲に集中し，歴史と文化に基づいたもので在り得るのは，上山藩3万石の遺産があるからである。しかし，同じく山形市と接する天童市，寒河江市と比較してみると，ここに上山市独自の選択があったことが分かる。天童は織田藩の城下であったし，寒河江には中世の城下が残っている。しかし，両市が目指したのは水田を区画整理して市街地拡大し，近代的な都市をつくることであった。それに対し，上山市は早くから文化財や史跡指定を行っており，そのため資産が残っていた。

また，市の主導で始めた協働のまちづくりでは，職員自身が塾生となった効果か，単なる道路工事を歴史と文化に基づく協働のまちづくりに，担当者レベルで変えている。それにより自発的な市民活動が起こってきた。

2007年以降の新たな展開では，東京から帰ってきたコミュニティ・アーキテクト，国から来ている副市長，大学と，よそ者の視点が働いている。学生という若者も参加し，足りないのは馬鹿者ということになろうか。

そこで最後に，まちづくりの課題を挙げ，今後の展望について述べよう。最初に挙げなくてはならないのは，当事者である商店街の盛り上がりの欠如である。未来会は会合こそよく開いているが，活動の主役に成りきれていない。その理由は自身の商売の多忙にある。かつて商店街の旦那衆は，商売は番頭に任せて自分は商店街や町の未来を考えた。しかし商店街が衰退した現在，他人のことを考える時間があったら自分の商売を頑張りたいとは，十日町未来会からの声である。みちのくギャラリーの取り組みも親の世代であり，働き盛りは自分の商売を越えた動きができないでいる。十日町商店街は温泉であるにもかかわらず，日曜は閉まる近隣商店街であり，いつまでもこれで良いか疑問がある。

もう1つの課題は旅館組合である。ゆかたの似合うまちづくりのコンセプトを考えだした当人であるが，足湯カフェなどのほかは具体的なまちづくりを行えていない。今夏行われた「ゆかたの似合うまちづくり実行委員会」による上山城でのジャズフェスティバルも，浴衣での参加を呼びかけながら，それにあわせて企画されたツアー客は旅館と会場をバスで移動して，浴衣で歩く機会がなかったのは残念である。

3つ目の課題は，商店街，旅館組合，それぞれの所管課，まだまだ縦割りでバラバラな点である。本論文で述べた城址公園まわりの散策コース，実はこれがまだ市民に認知されていない。「ゆかたの似合う散策路」とでも名付けて，それをしっかり描きこんだ立派な地図をつくれば，共通理解が図れると思われるが実現できていない。

最後に，賑わいの核となるカフェやレストランであるが，集客が確実に見込めないため立ち往生している。情報のやり取りの場として考えると，活動組織が話し合う場はまちづくりセンターにできたが，市民や観光客が集うカフェの実現は難しい。その点でまちづくり塾のカフェは，両者を兼ね備えた存在として成果を生む可能性もある。しかし，まずは今ある資源を使った散策人口を増やすことから始めるべきかも知れないと思っている。

引用・参考文献

1) 吉村輝彦（2010）：対話と交流の場づくりから始める協働型まちづくりの展開に関する一考察ー名古屋市名東区「めいとうまちづくりフォーラム」を事例にー：都市計画論文集45(3),313-318

2) 田中晃代（2009）：地域協働型まちづくりにおける市民が担うフォーラム運営の課題と展望ー大阪府吹田市「東部拠点のまちづくり市民フォーラム」を事例にー：都市計画論文集44(3),571-576

3) 柳川豪・加我宏之・下村泰彦・増田昇（2006）：堺市金岡町における住民発意型まちづくり活動の発展プロセスに関する研究：ランドスケープ研究69(5),751-756

4) 登根哲生・嘉名光市・姥浦道生・赤崎弘平（2006）：都心のまちづくり団体の抱える課題からみた大学の都心まちづくりへの参画の意義について：都市計画論文集41(3),343-348

5) 卯月盛夫（1995）：住民の主体的なまちづくり活動を支援する「まちづくりセンター」に関する考察ー世田谷まちづくりセンターを事例としてー：日本建築学会計画系論文集410,161-172

6) 藤本真理・赤澤宏樹・鳴海邦碩・中瀬勲（2008）：兵庫県立有馬富士公園における住民グループの主体的活動とその継続の要因に関する研究：ランドスケープ研究71(5),811-816

7) 柴田祐・二神茉莉子・澤木昌典（2008）：神戸市「里づくり計画」に位置づけられた都市農村交流の担い手と継続性に関する研究：ランドスケープ研究71(5)，755-758

8) 島田昭仁（2007）：まちづくり運動の連帯における共同態の発見とその応用可能性ー小布施町と桐生市のまちづくり運動の比較を通してー：都市計画論文集42(3),319-324

9) 野嶋慎二・松元清悟（2001）：まちづくり市民組織の発足と展開のプロセスに関する研究ー長浜市中心市街地の事例ー：都市計画論文集36,7-12

10) 内田奈芳美・佐藤滋（2006）：地域協働型社会に向けた市・区による提案公募型まちづくり助成制度の発展経緯とその現状評価：日本建築学会計画系論文集606,115-122

11) 田川絢子・内田奈芳美・佐藤滋（2006）：「地域づくりの場」としての中野区住区協議会の実態に関する研究：都市計画論文集41(3)，337-342

12) 秋田典子（2010）：まちづくり条例に基づく地区レベルのまちづくり制度の運用実態に関する研究ー神戸市まちづくり条例に基づくまちづくり協議会を事例としてー：都市計画論文集45(3),7-12

13) 上山市まちづくりアドバイザー（筆者）を含めた新体制でスタートしたが，結果を見ると，アドバイザーは独自の存在と看做されると判断した。

14) 酒井信一郎（2011）：かみのやま　街の記憶　時のスケッチ：上山まちづくり塾

15) （2001～2011）：まちづくりセンターニュース（ござってぇ便り）：上山まちづくり塾（上山市まちづくりセンター）http://kaminoyama-machisen.jp/news